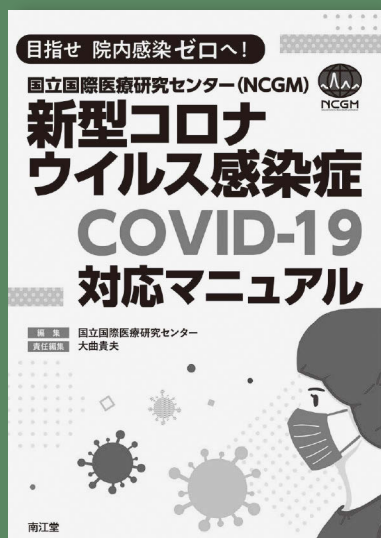


書評

目指せ 院内感染ゼロへ！
国立国際医療研究センター
(NCGM)新型コロナウイルス
感染症 (COVID-19)
対応マニュアル



- 編集 国立国際医療研究センター
- 責任編集 大曲貴夫
- 定価 2420 円 (本体 2200 円 + 税 10%)
- 判型 B5
- 頁数 144
- 発行 南江堂

評者

東京都看護協会 会長
山元恵子

いち早く有効で適切な対策を選択するために

クライシスマネジメントとしての組織管理の視点が充実

本書の特徴は、初療に当たる救急部門から、患者が機能や生活を取り戻すためのリハビリテーション部門まで、幅広い領域での最前線の対策が紹介されていること、さらに執筆者の3分の1は現場の看護師であり、対策の中に患者を支える視点や、職員のメンタルサポートを含めたクライシスマネジメントとしての組織管理の視点が充実していることにある。

新型コロナウイルス感染症は、日本では当初、2020年1月に「原因不明の肺炎」としてネットやニュースで話題になったが、あまり深刻な状況ではなかった。なぜならば日本では、2002～2003年に中国・香港・シンガポール・カナダに広がったSARSや、その後中東を中心に広がったMERSが国内に持ち込まれた時、院内感染や地域流行が起きなかったからである。しかし当時は、海外では患者だけでなく医療者の命も失われており、連日メディアが伝える現地の様子は、一般市民はもちろん医療関係者にとって大きな恐怖となった。

また、記憶に新しいのは2009年に日本でも拡大した新型インフルエンザである。結果的には季節性インフルエンザと変わらないレベルではあったものの、初期の混乱や患者・医療関係者に起きた差別・偏見問題は、私たちの社会が「たびたび起きる新しい感染症にいかに脆弱であるか」を示した。このような感染症の騒動が起きるたびに現場はひどく混乱し、感染症そのもの以上に医療関係者やその家族も負担を抱えるが、その蓄積が活かし切れない。

エビデンスに基づいた各部門の対策を分かりやすく

本書の2つ目の特徴は、日本において

高度な感染症医療を展開し、多くの人材を育ててきた国立国際医療研究センター(NCGM)が編集していることである。

同センターには、日本人のデータをまとめ、「このようにすれば安全に医療を提供できる」「患者を支えることができる」と常に情報を発信する専門家集団が存在する。本書では、その中で高度な医療を展開し、多くの人材を育ててきた同センターのリーダーである大曲医師らを中心に、各部門での対応のノウハウがエビデンスに基づきまとめられている。そのためその内容には高い信頼性と再現性があり、新型コロナウイルス感染症だけでなく他の感染症対策としても活かされる内容となっている。

本書の3つ目の特徴は、分かりやすさである。新型コロナウイルス感染症の話題は、検査と治療に集中しがちであるが、診断の決め手となる放射線科、病棟で患者をケアする看護やリハビリテーション部門まで含めたチームとしての連携や、職員食堂などのバックヤード部門での対策も紹介され、簡単に真似できるように豊富なイラストや写真・図表が挿入されている。

*

今回、医療現場では、新型コロナウイルス感染症への対応により、有事の危機管理体制の弱点を突き付けられてきたが、今後も私たちは新しい感染症に対峙しなくてはならない。

私たちの目の前には困っている患者や家族、スタッフがいることを忘れず、いち早く有効で適切な対策を選択するために本書を活用し、組織全体の感染対策として良質な医療を提供できる病院・施設が増えることを願っている。